

2021

国語

〔帰国生入試〕

注 意

1. 試験時間は、8：50～9：40の**50分**です。
2. 問題は □・□ の2つです。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

□ 次のカタカナの文章に句読点をほどこし、漢字ひらがな交じりの文章に書きかえなさい。(漢字で書けるものは全て漢字で書きなさい。)

ヒビクラシノナカデリヨウスルサトヤマヤクラシマモルモリヲツクリダスコトニヨツテワタシタチノソセンハ
モリニカヨウミチヲツクリダシタソノモリニカヨウミチトトモニモリノブンカガツクラレタコトヲミルトキハジ
メテニホンノキノブンカハモリトムスビツクトカンガエルノデア

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この旅において、①自分が自分に(注1)課したささやかなルールというようものがあつたとしたら、デリーからロンドンまで(注2)乗合バスで行くことしかなかっただろう。

それでそのルールがどうなったかと言えば、ギリシヤからイタリアに渡るときと、フランスからイギリスに渡るときはフェリーを除いて、ほぼ守り切ることができたとと言えるかもしれない。ほぼ、というのは、アフガニスタンとイランの国境からテヘランまでは、普通の乗合バスではなく行く先々で乗客を集めていく(注3)ヒッピーバスに乗ったからだ。私が乗ったのは出発点のカトマンズからアムステルダムまで行くというバスだった。(I)の乗合バスではなかったが、広義の乗合バスといえないこともないので、ほぼ、ということになる。

乗った距離は約二万キロ、地球を半周ほどしたことになる。そんなに乗っても平気なくらい②私はバスが好きだったろうか。考えてみても、aさほど好きだったとは思えない。

小学校から中学校にかけての七、八年は、東京の池上にある自宅から大森にある映画館まで毎週のように通っていた。その映画館に知り合いがいたおかげで、二本立ての封切り映画を無料で見ることができたのだ。往復の乗り物は路線バスだった。そのため、小学校の絵日記という、必ず銀色の車体のバスを描き、それに乗って映画館に行ったということを書いていた。しかし、だからといって、バスが好きだったわけではなく、他のテーマを探るのが面倒なだけだったのだ。

高校時代は通学にバスを使ったが、大学に入ってからほとんどバスに乗ったことがなかった。時間が不正確だということもあったが、なによりバスの中に流れているあの「(注4) かつたるい空気」が耐えられなかった。

その私が、万という単位のキロ数の距離をバスに乗って旅することになった。自分でも驚くが、だからといって決して我慢を我慢していただけない。乗っているうちにバスが好きになってしまったのだ。

どのバスもオンボロだった。それでいて恐ろしいほどスピードを出す。隣に坐った人は、あれこれ食べ物を勧められる。それにタバコだ。実際、何十人にタバコを勧められたことだろう。成人の男たちは一種のあいさつがわりにタバコを勧める。私はタバコを吸わないが、③この旅のときばかりは吸わないことを後悔した。素直に一本もらえば、そこでぐつと互いの気持が近づき、通い合うものが A 生まれてくるように思えたからだ。逆に、タバコを B ねだられることもよくあったが、持っていないのでそれに応じられない。

乗り合わせた客に過剰なほど親切にされることも少なくなかったが、最初から最後まで煩わされつづけるというほどのことはなかった。窓側の席だったりすれば、周囲の人との対応に疲れたら、顔をガラスにつけるようにして外を眺めていれば、ひとりになることができる。これが列車の四人掛けの席では、なかなかひとりになることはできない。とりわけ長い時間となれば、膝を突き合わせている相手となんらかのコミュニケーションを取らざるをえなくなる。疲れているときはこれが苦痛になる。

もうひとつ、④バスの旅のいいところは風景が近いということだった。駅が街と離れている鉄道と違い、バスは街の真ん中を通過していくことが多い。建物や街路といったものだけでなく、その建物に住む人や街路を行き交う人をはじめとして、市場で買い物をする女性や公園で遊ぶ子供たちまで間近に見ることができる。あらゆる意味で風景が近いのだ。

バスでは、乗客の荷物を、屋根にのせるか車体の両脇にある収納部分に C 入れるかする。自分の荷物が屋根にのせられれば、いくらロップでしっかり縛ってあるといっても、ガタガタ道の振動で落ちないだろうかとか心配になり、収納部分に D 入れられれば、先に降りた人に間違えて持っていかれてしまわないだろうか、悪い奴に盗まれたりしないだろうかとか不安になる。

しかし、幸いなことに、私のザックは最後まで無事だった。ただ一度だけ災難に遭ったのはトルコだった。イランとの国境から乗ったバスがエルズルムに着いたとき、脇の収納部分から引き出された私のバックパックが異臭を放っていた。見ると、どこからか漏れたガソリンがバックパックのポケットの部分に染み込んでいたのだ。

それから、日本に帰るまで、バックパックのガソリン臭に E 悩まされつづけることになった。

ひとりバスに乗り、窓から外の風景を見ていると、さまざまな思いが(注5)脈絡なく浮かんで消えていく。そのひとつの思いに深く入っていくと、やがて外の風景が鏡になり、自分自身を眺めているような気分になってくる。

バスの窓だけではない。私たちは、旅の途中で、さまざまな窓からさまざまな風景を眼にする。それは飛行機の窓からであったり、汽車の窓からであったり、ホテルの窓からであったりするが、間違いなくその向こうにはひとつの風景が広がっている。しかし、旅が続いていると、ぼんやり眼をやった風景の中に、不意に⑤私たちの内部の風景が見えてくることがある。そのとき、それが自身を眺める窓、自身を眺める「旅の窓」になっているのだ。ひとり旅では、常にその「旅の窓」と向かい合うことになる。

フレドリック・ブラウンが『シカゴ・ブルース』というミステリー小説の中でこんなことを書いている。

「おれがいろいろとしたのはそれだよ、坊や。窓の外を見たり、なにかほかのものを見るとき、自分がなにを見てるかわかるかい？ 自身を見てるんだ。ものごとが、美しいとか、ロマンチックだとか、印象的とかに見えるのは、自分自身の中に、美しさや、ロマンスや、感激があるときにかぎるのだ。目で見るのは、じつは自分の頭の中を見ているのだ」

青田勝訳

ひとり旅の道連れは自分自身である。周囲に広がる美しい風景に感動してもその思いを語り合う相手がいない。それは寂しいことには違いないが、吐き出されない思いは深く(注6)沈潜し、忘れたいものになっていく。

(X)、せめて夕食のときくらいは誰かと話しながら食べたいと思う。(Y)、相手のいないひとり旅では、黙って食べ物を口に運ばなくてはならない。寂しいと思う。だが、その寂しさを強く意識しながらひとりで食事をするとき、そのひとりの時間が濃いものになっていく。

このユーラシアの旅では、高級なレストランでその土地の名物を食べるといふ経済的な余裕はなかったので、いつもその土地の人が食べる b 安直なものをその土地の人と一緒に食べていた。だから逆にさほど寂しさは感じなかった。

しかし、バスに乗ってぼんやりと外の風景を眺めるたびに、ひとりであることを強く意識させられることになった。バスでは、「旅の窓」が最初から最後まで一緒についてくるからだ。

ただひとつ、バスの旅に関する後悔がある。

バスは昼間の時間に乗ることが多かった。朝に乗って、夕方に降りる。基本的にはその繰り返しだった。しかし、何回か夜行のバスを使ってしまったことがある。そのときは、夜行バスの便利さを優先したのだが、日本に帰ってきてそれを後悔することになった。

私はデリーからロンドンまで地続きのルートを取った。二カ所は海だったが、それも空を飛んだわけではなく、地面の延長としての海を行っただけだ。

そのおかげで、ユーラシアの風景がひとつづきのものとなった。ところが、夜行のバスに乗ってしまったところだけは、⑥「一本の線として繋がらず途切れてしまっている」。

それだけではない。そのときには考えもしなかったが、もしかしたら、そこはもう二度と行くことのできないところだったかもしれないのだ。その大切な風景を私は見逃^{みのが}してしまった。

このユーラシアの旅以降、私の旅に乗合バスはつきものになった。やがて行くことになるアメリカでも、北アフリカでも、中国でも、乗合バスに乗ってさまざまな土地を旅することになった。そして、その旅においては、夜間には決してバスに乗らないことというのがひとつの決めごとになった。

『旅する力』 沢木耕太郎の文章による)

(注1) 課した：やるべきこととして、義務づけた。

(注2) 乗合バス：貸切バスとは異なり、路線を走る一般的なバスのこと。

(注3) ヒッピーバス：「ヒッピー」とは、一九六〇年代後半にアメリカ合衆国に登場した人々で、社会にすでにある伝統や制度などにある価値観を否定した。彼らのように、安価な旅を求めて利用したバスのことを「ヒッピーバス」と呼んだ。

(注4) かつたるい…だるくて、気分が重く感じられる。

(注5) 脈絡なく…きちんとした筋道もなく。

(注6) 沈潜し…心の中に深く沈みこみ。

問一 波線部 a・b の本文中での言葉の意味として最も適当なものを次のア～オから選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア 確かに

イ たいして

ウ まったく

エ いくらか

オ ずいぶん

b 安直な

ア 郷土ならではの

イ 安心できる

ウ 直ぐに出てくる

エ いい加減な

オ 安くて手軽な

問二 二重傍線部「勧められた」の太字「られ」と同じ意味で使われている言葉を、本文中の傍線部 A～E の太字の中から二つ選んで、記号で答えなさい。

A 生まれて

B ねだられる

C 入れるか

D 入れられれば

E 悩まされつづける

問三 傍線部①「自分が自分に課したささやかなルール」とありますが、それはどのようなものですか、十字以内で答えなさい。

問四 空欄Ⅰに入る適当な語を、次のア～オから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 特別 イ 当然 ウ 予定 エ 一般 オ 完全

問五 傍線部②「私はバスが好きだったろうか」と小学校時代から大学時代までを振り返って述べることには、どのような意味があるのでしょうか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア 小学校の頃に初めてバスに対する興味が生じたが、段階を経てバスへの思いが次第に変化していったことを印象づけるため。
イ 鮮やかな銀色のバスや「かったるい空気」など、具体的な表現を使うことで懐かしい思い出に浸っている世界観を作り出すため。
ウ 現在とは対照的にバスが好きではなかった頃を語ることで、大人になってバスの旅を通して変化した意識を明確に表現するため。
エ バスの旅という特別な旅のあり方について述べる前に、誰もが経験しているであろう子供の頃の思い出を語って共感を得るため。
オ 子供の頃から今に至るまでの記憶を一つひとつ呼び起こして整理することにより、自分の抱いた驚きの原因を解明するため。

問六 傍線部③「この旅のときばかりは吸わないことを後悔した」とありますが、なぜ後悔したのでしょうか。その理由を三十字以内で答えなさい。

問七 傍線部④「バスの旅のいいところは風景が近いということだった」とありますが、「風景が近い」とどのような点が良いのでしょうか。四十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑤「私たちの内部の風景」として見えてくるものとは言い換える^かと何ですか。本文中より四字で抜き出しなさい。

問九 空欄X・Yに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|-------|-------|---|-------|--------|---|--------|-------|
| ア | X…やはり | Y…そして | イ | X…ただ | Y…そこで | ウ | X…もちろん | Y…しかし |
| エ | X…確かに | Y…すると | オ | X…さらに | Y…なぜなら | | | |

問十 傍線部⑥「一本の線として繋がらず途切れてしまっている」とはどのようなことを言っているのでしょうか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選んで、記号で答えなさい。

- ア ユーラシア大陸の広大な地をどうたどったのか、一本の線で結ぼうとふり返っても、どこを通ったのか分からないということ。
- イ バスの窓から見えた景色は、昼間見る景色と夜中に見える景色とは全く違っていて同じ世界とは思えなかったということ。
- ウ ユーラシア大陸の様々な風景を一つひとつ思い出していくと、それぞれの文化の差が大きく、生活の違いを感じるということ。
- エ バス旅の間に窓から見えた風景が心に深く焼き付いているが、一部分だけ見ることができずに記憶に残っていないということ。

問十一 あなたがはじめて訪れた場所で、興味をひかれた経験を一つ挙げて説明してください。なお、興味をひかれた理由も分かるように答えてください。

一、20点

日々暮らしの中で利用する里山や、暮らしを守る森を作り出すことによって、私たちの祖先は、森に通う道を作り出した。その森に通う道と共に森の文化が作られたことを見る時、初めて日本の木の文化は森と結び付くと考えるのである。

二、80点

問一 a イ b オ ③×2

問二 B・E ②×2

問三 乗合バスで旅をする ⑤

問四 エ ③

問五 ウ ⑤

問六 見知らぬ人と心を通い合わせるきっかけを失ってしまったため。 ⑧

問七 窓の外の世界と距離が近く、そこに住む人々の生活の様子を間近に感じ取れる点。 ⑧

問八 自分自身 ④

問九 ウ ③

問十 エ ④

問十一 30点 (自由記述)

訪れた場所 5点

興味を引かれたこと 15点

理由 10点

主語：：5点

述語：：5点

話の展開が明確：：5点

なぜ興味をひかれたのかという答えになっている：：5点

既存の知識や比較対象などがはっきりと書かれている：：5点